

自己評価報告書

平成23年5月9日現在

機関番号：23803

研究種目：基盤研究（A）

研究期間：2008～2011

課題番号：20252005

研究課題名（和文）黒海地域の国際関係－4次元分析における学際的総合研究

研究課題名（英文）International Relations in the Black Sea Region: An Interdisciplinary Study with Four Dimensional Analysis

研究代表者

六鹿 茂夫 (MUTSUSHIKA SHIGEO)

静岡県立大学・国際関係学研究所・教授

研究者番号：10248817

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会科学A・国際関係論

キーワード：黒海国際関係、広域ヨーロッパ

1. 研究計画の概要

本研究は、近年国際的に益々関心の高まっている黒海地域を、①歴史、②域内国際関係、③域外国際関係（外部アクターとの交わり）、④経済関係の4次元から多元的且つ重層的に分析し、黒海国際関係の全体像を包括的に描き出すことで、日本のみならず世界における地域研究および国際関係学研究所の発展に寄与することを目的とする。

本目的を達成するため、黒海地域を地域として捉えることの妥当性と意義、同地域の特徴、域内の協力および対立の構造などについて、海外での調査を交えて分析するとともに、2年目にボアジチ大学（イスタンブール）、最終年に静岡県立大学にて国際シンポジウムを開催し、それらの成果を日本において書籍として出版する。

2. 研究の進捗状況

本研究は、以下に記すように概ね順調に進展している。

(1) 歴史的次元では、18 - 19 世紀における黒海の国際問題化の起源と過程、および黒海をめぐる大国間関係が黒海地域の近代化に与えた影響の二点について研究を進めた。その結果、前者に関しては、黒海の地域性を歴史的観点から考察した論文や18世紀後半のバルカンをめぐるロシア・ハプスブルク・オスマン帝国間の政治外交関係に関する論文の発表などにより、ロシアの黒海地域への進出過程を西欧諸国やオスマン帝国の動向にも配慮しつつ実証的に跡付けた。また後者に関しては、周辺大国との関係を踏まえた近代バルカン・カフカース史に関する一連の論考により、「黒海」ファクターの歴史的諸相を明らかにした。

(2) 経済的次元では、黒海諸国の対外経済関係の構造、黒海諸国の産業構造の相互補完性の度合い、黒海諸国間の金融フロー、黒海諸国のエネルギー依存の実態に関して各々調査するとともに、①国際貿易、②国際金融、③国際労働力移動の観点から研究を進めた。①に関しては、国連の Direction of Trade Statistics を利用して、BSEC 加盟諸国の域内貿易および域外貿易の実態を、②に関しては、IMF の International Financial Statistics その他のデータを用いて、域内各国の経常収支の構造とファイナンスの仕組みを、③に関しては、世界銀行の資料及び当該各国のデータを用いて、国際労働移動の実態と移動する労働者が運ぶ金融資産の流れを明らかにした。

(3) 域内国際関係では、黒海地域の地政学、地域の多様性と特徴、域内国際政治の構造、EU 加盟地域諸国の役割とトルコの多角外交、BSEC、GUAM、黒海フォーラムなどの地域組織における協力と対立などについて分析した。また、地域諸国家間の領土・民族紛争、なかんずく凍結された紛争とコソヴォ紛争、民主化と体制変動、エネルギー安全保障など地域に顕著な政治問題を、①国内、②二国間、③トランスナショナル、④国際という4つのレベルから分析を進めた。

(4) 他方、域外国際関係では、黒海地域に少なからぬ影響を及ぼす広域ヨーロッパの国際政治構造を明らかにするとともに、EU の東方政策（欧州近隣諸国政策（ENP）、東方パートナーシップ、黒海シネルジー、ドナウ戦略）、NATO 拡大とグローバル・パートナーシップ、米露軍事競争、OSCE の予防外交などに重点を置いて分析した。さらに、グルジア＝ロシア戦争の分析を介して、黒

海地域内と域外の相互関係について分析するとともに、黒海地域の国際政治が広域ヨーロッパ、ひいてはグローバルな国際政治を規定する要因となりつつある点を指摘した。加えて、バレンツ協力(BEAC)との比較研究を行った。

3. 現在までの達成度

グルジア＝ロシア戦争後の諸大国関係の再編や、最近の北アフリカ・中東情勢の変化などによって、新たにに取り組むべき問題が生じたとはいえ、研究は上述したように計画通り順調に進んでいる。それは、本科研メンバーによる『ユーラシア研究』(No. 42, May 2010)における黒海特集や、羽場・溝端編『ロシア・拡大EU』(ミネルヴァ書房、2011年)の2論文などにおいて明らかである。とはいえ、研究の完成と黒海研究に関する書籍の出版をめざし、最終年では以下4の諸点に関して研究を深めていく必要がある。

4. 今後の研究の推進方策

(1) 歴史的次元では、周辺大国と黒海地域の諸関係について、周辺大国および黒海周辺地域双方の視点から研究を深めるとともに、黒海地域の地域性について、歴史的観点から再検討していく。

(2) 経済的次元では、黒海経済協力機構(BSEC)が、地域経済協力機構として今後どのような役割を果たしうるかについて、国際貿易、国際金融、国際労働力移動の各側面、特に最後の要因に関しては資金移動の側面に注意しながら、総合的な評価を行う。そのために、これまでの成果を、国際学会等で積極的に発表し、海外専門家の批判にさらすことによって、質の高い完成品にしていく努力が不可欠となる。

(3) 政治的次元では、グルジア戦争後の諸大国間関係(米露リセット、EU＝ロシア関係、NATO＝ロシア関係など)、台頭する中国、最近の中東情勢など新たな国際政治の変化が黒海地域に及ぼす影響について、最新の情報をもとに分析する必要がある。また、逆に、グルジア＝ロシア戦争、ウクライナやモルドヴァ共和国の最近の政権交代が、黒海地域の国際関係、広域ヨーロッパ、諸大国間の国際政治にいかなる影響を及ぼすのかについても研究する必要がある。

(4) 方法論的には、①3年間の研究成果を踏まえて、黒海地域の地域性について再検討する、②他地域との比較分析を深め、問題の特殊性と共通性を明らかにする、③国家レベルの関係のみならず、企業が及ぼすトランスナショナルな関係を、下位国家、国家、地域、トランスナショナル、広域ヨーロッパという多次元かつ広域な国際関係の中で分析することによって、研究の間隙

を埋めていくことが肝要である。この点に関して、秋の国際シンポジウムで内外の研究者と議論を深め、より包括的な形で研究をまとめ、書物や研究報告として成果を発表していく。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計42件)

① 吉川元「民族自治制度とアイデンティティ政治—ザカフカス民族紛争をもたらした自治制度」『法學新法』中央大学法学会、第117巻、第11・12号、2011年、457-494頁、査読無

② 上垣彰「黒海経済協力(BSEC)を通じてみた黒海地域の経済」『ユーラシア研究』第42号、2010年、28-33頁、査読無

③ 服部倫卓「経済危機後の黒海港湾セクター」同書、34-39頁、査読無

④ 黛秋津「「黒海地域」という地域認識」同書、40-45頁、査読無

⑤ Shigeo Mutsushika, “Transformation of Relations among the Big Powers over the Black Sea Region after the Georgian War,” *Report of the Third Japan-Black Sea Area Dialogue: Prospects of Changing Black Sea Area and Role of Japan*, 2010, Tokyo, pp.19-28, 査読無

[学会発表] (計28件)

① Michitaka Hattori, “International Political Economy of Black Sea Port Sector: Rivalry between Russia and Ukraine,” 2nd East Asian Conference of Slavic-Eurasian Studies, Seoul, South Korea, 4 March 2010.

② Takayuki Yoshimura, “Soviet Armenia’s Propaganda for the Armenian Fatherland over their Communities Abroad in 1920’s,” International Symposium at the Bogazici University, Istanbul, Turkey, 1-2 October 2009.

[図書] (計17件)

① 六鹿茂夫「広域黒海地域の国際政治」、羽場・溝端編『ロシア・拡大EU』ミネルヴァ書房、2011年、265-284頁(共著)

② 廣瀬陽子「EUとコーカサス・中央アジア」同書、243-264頁(共著)

③ Shigeo Mutsushika ed., *Black Sea Region in International Relations: Old Issues, New Trends* (Report of the International Symposium at the Bogazici University, Istanbul, Turkey, 1-2 October 2009), 2011, 157頁

④ 廣瀬陽子『コーカサス—国際関係の十字路』集英社、2008年、224頁